

論文審査の結果の要旨

氏名 佐藤 典子

知覚や記憶のなかで真実と虚偽が入り雑じり、言葉が容易に意味を伝達できず、真実の所在そのものが曖昧になってしまう事態が、しばしばフランスの、ひいてはヨーロッパの現代文学の中心主題に据えられる。たとえば、確固たるアイデンティティをもつ人物の情熱や冒険を曇らない言葉で描く伝統的小説とは違って、現実認識の困難や言語によるコミュニケーションの不能が、現代小説の格好の題材となるのである。寡作と難解をもって知られる詩人・小説家ルイ＝ルネ・デ・フォレ（1918 - 2000）は、このような不可知論的傾向を代表する作家である。佐藤典子氏の論文「デ・フォレの小説作品と読者」は、従来注目されてきた登場人物の発話願望や発された言葉の「うつろさ」よりも、むしろ架空の読者（聞き手）の存在に着目することで、デ・フォレ研究に新たな一步を画している。

本論文の主要部分は、デ・フォレの長い文学活動の前半に書かれた小説作品（長篇小説『乞食たち』『おしゃべり』、および短篇小説集『子供部屋』）の一篇一篇を、「読者」ないし「読む行為」の視点から克明に解説する作業に充てられている。その際、佐藤氏は三つのレベルの「読者」を想定する。第一に、最もふつうの意味における作品の読者、第二に、書き手の意識に付きまとうもうひとりの自分としての読者、第三に、作中人物が他の人物の書いた手紙などを「読む」行為が物語を大きく展開させるという意味での読者、である。

初期の長篇『乞食たち』に登場する 11 人の人物の間で顕著な行き違いや亀裂について、氏は、彼らの誰もがそれと気づかずに潜在的な読者（聞き手）に向かって語りかけていると見れば、齟齬はむしろ人物相互の類似性として捉え直されると言う。また、ひとりの男の長大なモノログからなる『おしゃべり』では、主人公が設定する虚構の読者がこの独白を多元的に支え、テキストと現実の読者とを架橋する役割を果たしていると指摘する。さらに『子供部屋』については、個々の短篇の話者がみずからの物語の多少とも恣意的な解釈者であり、虚構の製造者になっているとする。これらの指摘は、いずれも作品の綿密な分析から引き出された、斬新で説得的な解釈である。

読み手が自分を投影しないでは（対象から虚構を創り出さずには）対象を捕捉しえず、想像力による虚構化作用こそが認識にとって、いや生きることにとって、不可欠なものであるという人間観が、デ・フォレの創作の基盤をなしているというのが本論の結論である。これはひとりデ・フォレに限らず、現代文学に底流する一傾向を巧みに言い当てている。「読者」の三つのレベルの関係付けが多少不十分であるという難点はあるものの、各作品の精密犀利な読解と全体的展望の確かさが、けれん味のない明快な文章表現に支えられた本論文は、全体として高い水準の達成を示している。

よって、審査委員会は、本論文が博士（文学）にふさわしいものと判断する。